

基調講演：AI に負けない力を育む子ども中心の保育

講師：お茶の水女子大学名誉教授 IPU 感環太平洋大学教授
内田伸子先生



「学力格差は経済格差を反映するか？」

教育学者やマスコミは、「学力格差は経済格差を反映させている。保育所に通う家庭の所得が低いためではないか。」と発表した。この発表に疑問をもち経済格差と連動していて、学力低下をもたらす媒介要因があるのではないかと思いこれについて、実証的な証拠を出してみたいと考えた。

習い事の種類と読み・書き・語彙との関連については、2009 年子育て世帯の平均所得 601 万を境として調査した。その結果所得との関連は見られなかった。しかし、知能検査の代わりに行った絵画語彙検査では、この家庭の所得の違いが顕在化するという見解になった。

「語彙力・語彙能力」

学習塾の学習が子どもの語彙をひろげているわけではなく、いつも会う幼稚園の先生や父親母親とは違う、スイミングのコーチであったり、英会話スクールの先生であったりというような、違う大人に出会う事、いつもと違う仲間たちと遊び異年齢交流をし、そこでは様々な会話が起こることで、語彙得点が高くなり、コミュニティが多様になるからであろうと推測した。

「運動能力の発達」3・4・5 歳児全国 9,000 名の運動能力調査

体操・バレエ・ダンス教室に通っている子どもや、体操の時間を設けている「Y 式プログラム」を導入して一斉保育をしている幼稚園や保育園に通園している子どもの運動能力は、統計的に有意に低く運動嫌いも多い。

なぜか？

- ① 特定の部位を動かす同じ運動を訓練しているのでつまらない
- ② 説明を聞いている時間が多く、動き回る時間が少ない
- ③ 5 歳半までは競争心をもつ段階ではない。5 歳半過ぎから人と比べ、友達より自分が出来ないと嫌になり運動嫌いになるという悪循環が起こっていることがわかった

運動能力を伸ばしたければ自発的な自由遊びを大事にする子ども中心の実践し、遊びの楽しさを体験できる環境と保育者の働きかけがあるともっといいとの提案があった。

「しつけスタイルと語彙能力」

私達の調査ではしつけスタイルと語彙得点の間にも関連が見られた。

- ・共有型しつけ…親子のふれあいを大切にしたい 子どもと楽しい経験を共有したい
- ・強制型しつけ…子どもをしつけるのは親の役目 悪いことをしたら罰を与えるのは当然
力のしつけも多用する

共有型しつけスタイルをすることで、子どものリテラシーの得点や語彙得点ともに高くなるという関連が検出された。

語彙能力の高い子どもは、共有型しつけを受けている
語彙能力の低い子どもは、強制的しつけを受けている

「共有型でなぜ語彙力が向上するのか？」

* 共有型＜洗脳コード＞

- ・考える余地を与える（援助型）サポート
- ・子どもに合わせて柔軟に調整する
- ・3つのH（ほめる・はげます・ひろげる）の言葉かけが多い

主体的に探索し、自律的に考えて行動する。（遊びに熱中して・楽しそう）

* 強制型＜制限コード＞

- ・考える余地を与えない指示的・トップダウン介入
- ・過度な介入、情緒的サポートの低さ
- ・3つのHのことばかけ無し

主体的に探索せず、他律的行動（親の指示を待ち・顔色を見ながら・緊張しながら）

しつけスタイルや保育形態は親がコントロールできる！

「遊び」を通して子どもは、「アクティブ・ラーニング（脳働学習）」する

(1) 「遊び」とは、仕事に対立する概念ではない。また「怠けること」を意味するものではない

幼児にとっての「遊び」とは自発的な活動であり、大脳（ブローカ野・海馬と扁桃体）は活き活きと働いている状態を指している。

(2) 「気分一致効果」叱られながらやった勉強は身につかない

○ 扁桃体が快（面白い・楽しい）状態

⇒ワーキングメモリーに情報伝達物質が送られ海馬を活性化

⇒知識を蓄えることができる⇒「好きこそものの上手」⇒自己肯定感⇒意欲や探求心　そして
非認知能力（AI に負けない力）が育まれ

「非認知能力に⇒AI に負けない力」

※「頭の良さ」だけでは生きていけない

非認知能力が必要

※非認知能力の獲得は、子どもがより年少の時点、特に、幼児期・小学校低学年の経験（生活・遊び）によって決まる

非認知能力

- ・他者と向き合う力（社会性・社交性）
- ・感情を管理する能力（自制心）
- ・目標を達成する能力（実行力）

「AI 時代の今こそ、外遊びが推奨される」

外遊びが育てる 3 つの力

(1) 視力　…遠くの景色や手元の見比べる→網様筋の調整機能が育つ→近視の抑制

(2) 運動能力…走ったり止まったり、自由自在に自分の体をコントロールする実感
→自己肯定感が高まる

(3) 言葉の力…四季折々の自然環境を体感→仲間や保育者、親とおしゃべりしながら自然を肌で実感する

「子どもの非認知能力を育む保育者の役割」

～頭はいつも先回り・援助は後からついていけ～

(1) 子どもに寄り添い信頼関係・愛着関係を結ぶ。先生との関係を安全基地にして子どもが自分の世界を広げていく

(2) その子自身の進歩を認め誉める。他児と比べない。3H：ほめる・はげます・（視野を）ひろげる

- (3) 「生き字引」のように余すところなく定義や解説、回答を与えない。
- (4) 「裁判官」のように「判決」をくださない。禁止や命令ではなく「提案」を！
- (5) 子ども自身が考え、判断する余地を残すこと
⇒**自律的思考力** そして **非認知能力**！

「子ども中心の保育」における保育者

子どもの自発性が発揮されるのは保育者の権威が最小限に抑えられた時
＝子どもと対等、子どもの視線で、かつ「レントゲンのような目で」
(現像の表面だけを捉えるのではなく、心の動きやつまづきまでも洞察)

語彙力：子ども中心の保育＞一斉保育
運動能力も！子ども中心の保育＞一斉保育

「保育者の援助の水準」

- 1 見守り：いつでも足場をかけられるように
- 2 足場かけ：見晴らしをよくしてやる。決定するのは子ども自身
- 3 省察促し：「どうしてかな」「どうなっているんだろうね」「どうしたらいいのかしら」などで子どもに再考させる 自分の決定を振り替えさせる
- 4 誘導：「ここをこうしたらどうかしら」具体的な解決策・手立て・考える道筋を洗える
- 5 教導：答や解説をトップダウンに与える

★1⇒5になるに従い大人の統制力が強くなる

- ・大人の援助や働きかけにより、発達を先に進めることができる
- ・大人は足場をかけてあげるが、大人ができるのはそこまで、階段は子ども自身に登らせる。活動や遊びの主人公はあくまでも、子ども自身である。

「保育・教育の原理」は「子ども中心の保育・教育」を実現すること

～活動の主体・主人公は子どもである～

○教育のPDCAサイクルもよき循環を図る

- ・保育計画⇒原則として保育計画にとらわれない⇒保育計画にこだわると子どもの姿や思いが見えなくなる
- ・保育記録⇒保育の見える化
- ・保育評価の考え方⇒PDCAサイクルを循環させる 振り返りのための保育カンファレンスを設ける
自己評価と園内評価

子ども中心の保育

「子ども中心との保育」とかけて？

こころは？・・・

*待ち 子どものこころの声をしっかり聴く

子どものつまづきを見抜く洞察力

子どもの考えが進むための足場